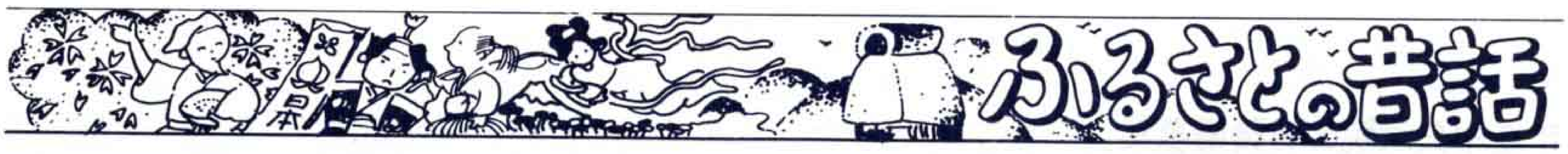
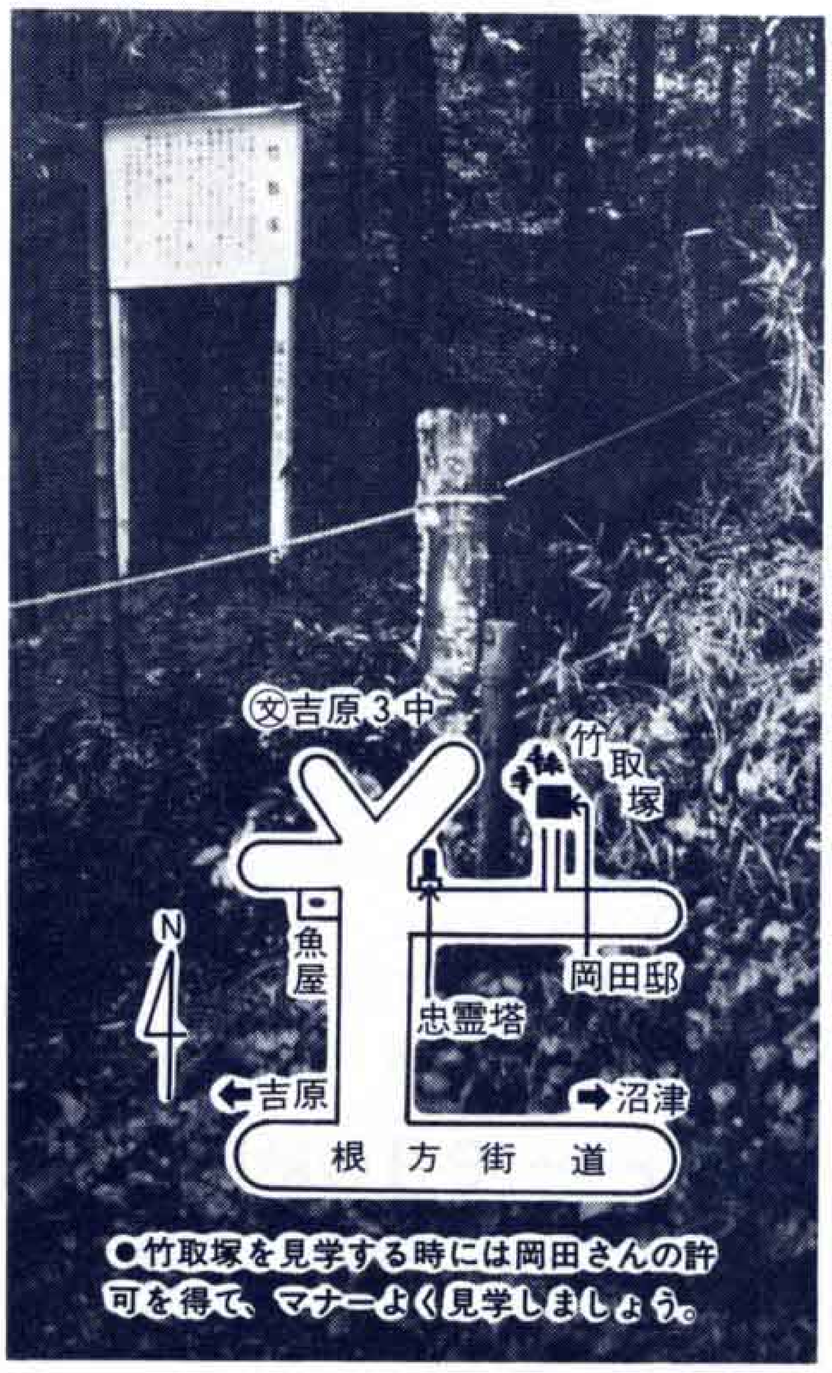


竹取物語

この物語の作者は紀貫之とか、源順とかといわれていますが、はっきり分っていません。また、いつ作られたものか明らかではありませんがたぶん平安時代はじめの作品で、わが国の小説の中で最も古いものだとされています。



竹やぶの中には竹取塚と由来の立札がある

吉原3中東側の竹やぶの中に竹取塚があります。

昔、ここにおじいさんとおばあさんが竹かごを作り暮らしていました。

ある日、おじいさんは竹やぶで光る竹の切株を見つけました。そこには10㌢ほどの赤ちゃんが入っていました。子どものない2人は大喜び、「きっと神様がお授けくださったに違いない」と、この子を大事に育てました。

この赤ちゃんをうちの子にしてから、おじいさんが竹を切ると小判が出るようになり、おかげで、おじいさんは金持になりました。赤ちゃんは竹のようにすくすく背が伸び3ヵ月ほどで、輝くような美しい娘になりました。おじいさんは、この娘をかぐや姫と名づけました。

かぐや姫のうわさは国中に広まりたくさんの人がお嫁にくださいと頼みにきました。その中で特別熱心な五人がいました。かぐや姫は「私の見たい物を早く取ってきた方と結婚します」と火ねずみの皮衣や竜の首の五色玉などの難問を一人一人に出しました。しかし五人とも失敗してしまいました。

それから幾月か過ぎ、姫は月を見て泣くようになりました。八月十五夜の満月が近づいた夜、「私は月の世界のものです。長い間かわいがっていただきましたが、こんどの満月の夜、月から迎えがくるので帰らなければなりません、それが悲しくて」と泣く訳を話しました。おじいさんは姫を渡すまいと決心しました。天皇もそれを聞き2000人の武士をさしむけ十五夜の夜を待ちました。

やがて天使が空飛ぶ車で迎えに来ました。弓矢をかまえていたのですが魔法の力で体が動きません。かぐや姫はしっかり抱いていたおばあさんの腕の中から、するすると抜け出て車の中に入っていきました。姫は不死の薬と着物をかたみに天に昇っていきました。姫がいなければ、こんなものはいらないと駿河の国にある日本一高い山の頂きに持っていき燃やしてしまいました。それから、この山の頂上からはいつも煙がのぼっていました。そこで人々は、この山を不死の山（富士山）と呼ぶようになりました。

天に昇ったかぐや姫は、おじいさん、おばあさんのことが心配になって、月がおぼろにかすむ春になると時々、三保の松原や千本松原に舞いおりてきたということです。

竹やぶの所有者の
岡田博さん(72歳)
中比奈3丁目

物語由来の地名がたくさん

私の竹やぶの塚でかぐや姫が発見されたといわれています。そのためこのあたりには、この物語に由来する地名がたくさんあります。私の家の番地が籠畑、西の3中あたりが赫姫番地、この比奈も姫奈村から、そして富士山も不死の山から名がついたみたいですよ。姫が別れを惜しんだ見返り坂も残っています。

表紙のことば

災害シーズンを迎えて、このほど市役所女子職員が防災研修会を開きました。

1回目は消防職員の指導で三角巾応急手当法。2回目は非常食のつくり方。非常食は、ハイゼックスという特殊ビニール袋に洗米0.8合(一食分）と同量の水を入れ、袋の中の空気を完全に抜いて口を結ぶ。この袋を沸とうしたお湯に入れて約30分煮て取り出すとおいしくご飯が炊き上がります。この方法だと災害時でも①包装食で中味が保護されているため衛生的②取扱いや運搬に便利③長期保存がきく（味つけ2日間、白米3日間、梅干入り1週間）などのメリットがあるほか、はしを使わなくても食べられる便利さがあります。指導に当った富士市日赤奉仕団の人も〝おいしくできました〟と太鼓判を押してくれました。

みなさんも

一度試してみてはー

三角巾の使い方を習う市女子職員